

1 学校教育目標 豊かな心を持ち よく考え 進んで実践する子どもを 育てる	2 本年度の重点目標 ①学校・家庭・地域の連携強化…地域のよさを発見し、地域に貢献しようとする児童の育成 ②豊かな心の育成…感謝の気持ちと思いやりがあり、心のふれあいができる児童の育成 ③確かな学力の育成…確かな知性と創造性を持ち、自ら学び課題解決ができる児童の育成 ④強い心と体の育成…強い意志と体力をもち最後まで頑張り抜く児童の育成
---	---

達成度 A：ほぼ達成できた B：概ね達成できた C：やや不十分である D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
①学校・家庭・地域の連携強化…地域のよさを発見し、地域に貢献しようとする児童の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	教師の授業力向上	・校内研究での道徳の時間を中心に「かかわる力」というキーワードを基に授業研究、授業公開を全職員が実施し、授業力向上に努める。	・道徳の時間の全体授業研究会を年2回実施し、全体の共通理解を図りながら研究を深めていく。 ・自分の思いや考えを伝え合う場や、道徳的価値の自覚を図る発問・板書・ワークシートの工夫に取り組む。 ・積極的に一人1回は授業を公開し、互いに学び合い、高め合う場を設定する。 ・全教科等で、「かかわる力」というキーワードをもとにした授業実践を行う。 ・全教科等で、授業のユニバーサルデザインに取り組む。	A	・全体授業研究会やグループ研を全教職員が参観し、事後の研究会で研究を深めることができた。 ・学校評価アンケートで、「心を育てるために道徳の授業の指導の工夫をしている」という問いに、「十分そう思う」「だいたいそう思う」と、100%の職員が回答している。それに対して児童の回答も86%となっていた。しかし学年別にみると、取組にばらつきが見られた。	・道徳の時間だけでなく、他教科でも日頃から自分の考えを伝え深める場(みなみタイム)を取り入れ、効果的な実践について研究を深めていく必要がある。 ・児童自身が「授業がよくわかった」と実感できるような授業を目指し、学校全体での取組として推進し、授業の質を上げていきたい。
	○地域との連携強化	教育目標の周知や保護者・地域への情報発信と連携の強化	・教育目標の周知目標 保護者90%以上 外部80%以上 ・授業参観やPTA総会等への参加率、ノーテレビノーゲームデーの実施率を上げる。 ・学校運営協議会、老人会、民生委員、婦人会等校区内の各団体との連携を密にし、関係充実を図る。	・必要に応じて、校区内の各団体と連絡調整を図り、学校行事等への協力を具体的に依頼する。 ・学校HP、南小だより、はなまる連絡帳等による情報公開や広報活動を充実させる。 ・学校運営協議会の取組や地域の方々の活用の様子等についてコミュニティスクールだより等により積極的に情報発信を行う。	A	・情報発信は、学校便りや学級通信などで行い、「様子を知らせている」との問いに「十分そう思う」「だいたいそう思う」との回答が地域96%、保護者86%だった。 ・授業参観等への参加率は、年間平均117%と高い結果となった。	・学校からの情報発信はこれまで同様に、学校便りや学校HP等を活用して積極的に行う。 ・保護者・地域との連携は、学校運営協議会や公民館などの機関を十分に活用して、さらに計画的に行いたい。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・「3K(可視化、共有化、効率化)で業務改善」を推進するとともに、昨年度の超過勤務時間42.6時間(1ヶ月平均)を、10%削減する。	・公務サーバー上で各分掌が情報共有を行いやすいように、フォルダ構成を工夫する。 ・SEI-Netや連絡掲示板を活用したり、行事予定の早めに提示したりしながら、資料のやり取りや職員間の連絡を効率的に行う。 ・1ヶ月の超過勤務時間が長い職員には、管理職が個別に声かけを行う。	A	・校内のPCの連絡掲示板の発信を約70回行い、業務の効率化を図ることができた。また超過勤務時間については、昨年度と比較して、約12%削減することができた。超過勤務が長い職員は個別に状況を聞き取り、それに応じた助言を行ってきたが、まだ十分に改善できていない状況である。	・退勤予定時間を守るよう一定期間を見通した業務計画を立てる。 ・タイムマネジメントに係る研修会を行い、働き方への職員の意識を変えていく必要がある。
②豊かな心の育成…感謝の気持ちと思いやりがあり、心のふれあいができる児童の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがある」と答える児童80%以上を目指す。 ・「白石に愛着を持っている」と回答する児童80%以上を目指す。	・「将来の夢」を毎年年度末に記入し、自分の夢の実現のために、今できることは何か考えさせる時間を設ける。 ・道徳の時間を中心に、郷土愛について学び考え、自分が住んでいる地域に対する愛着を深める。 ・伝統芸能や郷土料理など、地域の人材を活用した体験活動を実施する。	B	・「将来の夢」に自分の夢を書き込み、夢の実現のために今できることを考えさせることができた。 ・4年生で伝統芸能、5年生で郷土料理の体験活動を実施した。 ・アンケートによる実態把握ができなかった。	・「将来の夢」や伝統芸能、郷土料理などの体験活動の継続的な実施に努める。 ・児童の実態を知るために、アンケートを実施する。
	●心の教育	かかわる力の育成	・Q-Uテストの学級生活満足群の割合70%以上を目指す。	・友達との支え合いや助け合いを生む学級活動を仕組み、親和的な人間関係を育てる。 ・縦割り活動(掃除、遊び等)を充実させ、共感的人間関係を育てる。 ・校内の掲示など環境整備を充実させ、児童の感性を高める。	A	・Q-Uテストの結果は70%に達することは、できなかったが要支援群の児童は減った ・縦割り活動は充実できたと思う	・引き続き居心地のよい温かいクラスづくりに力を入れるとともに、些細なことでも職員間で共有しながら、温かい学校づくりを目指す。
		自己を律する力の育成	・「学校の決まりを守り、進んであいさつができた、正しい言葉遣いをしたりしている」が80%以上を目指す。 ・毎月の生活目標の徹底させる。	・「南小のくらしの約束」を各家庭に配布し、家庭と連携を図りながら指導する。 ・毎月の生活目標について各学級で具現化し、がんばることを決め取り組む。 ・各学年の取り組み内容や状況について放送等で紹介し、頑張っていることを認める場を作る。	A	・目標の80%を超える90%以上だった。全校集会などの集まりで、職員で分担して生活目標の話をすることで子どもたちに意識させることができた。	・数値は90%を超えてはいるが、各学年1名程度学級の決まりを意識できていない児童がいることから継続した指導が必要である。
	●いじめ問題への対応	相手を思いやる心の育成	・「友だちと仲良く活動することができている」が80%以上を目指す。	・Q-Uテストや生活アンケート、教育相談週間を年に2回実施して児童の実態を把握し、指導に生かす。 ・人権・同和教育や平和教育、命の教育を計画的に実践する。	A	・90%の児童が、友達と仲良くできていると回答。 ・学期に2回ずつ行う生活アンケートは、いじめの早期発見に繋がった。	・今後も生活アンケートやQUや教育相談週間を実施することで、いじめの早期発見や、児童の心の変化にいち早く個別対応できるように細心の注意を払っていききたい。
③確かな学力の育成…確かな知性と創造性を持ち、自ら学び課題解決ができる児童の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	学ぶ意欲の向上と基礎基本の定着	・1月のCRTテストにおいて全学年全国平均を上回る。 ・自分の考えを相手に分かるように工夫して書くことができた、伝えることができた、と肯定的な回答をする児童を70%以上にする。	・西部型授業を意識しながら授業を行う。とくに、何が得意になればいいの、何を考えればいいのかなど、児童が具体的にイメージできる「めあて」の提示や児童の発言を取り上げたり、キーワード等を示したりして、児童が「まとめ」を行うような授業を行う。 ・全教科において、書く活動、話し合う活動を取り入れる。 ・各学級でCRT調査等を分析し、結果に応じて「アシストシート」を活用する。朝の時間の国語タイムや算数タイム、また家庭学習に活用し、基礎・基本の定着を図る。「アシストシート」は使いやすいよう、クリアファイルに入れ整理する。また、すぐ使えるようにあらかじめ印刷し学年の棚にいれておき、活用を促すようにする。 ・6月と9月の授業参観に合わせ、『ノートコンテスト』を実施する。児童の学習のがんばりを披露する場とする。6月は学習ノート、9月には自主学習ノートを展示する。	A	・12月県調査の結果では、4年算数が3.3P県平均を下回ったが、他教科他学年は県平均を上回った。 ・西部型授業を意識し、書く活動、話し合う活動を取り入れてきた結果、83%の児童が「できた」と答えた。 ・国算タイムの充実と、徹底、低位層の児童に対する学習支援の工夫を行いながら、学力の底上げを目指す。 ・ノートコンテストの開催により、自学が充実してきた。	・「授業づくり1・2・3」にならって、授業を行う。 ・中学校のテスト期間に合わせ、「家庭学習ががんばり週間」を設けたり、「自学ノートコンテスト」では他学年の児童のノートを見る場を設けたりするなど工夫し、家庭学習の充実を図る。
		特別支援教育の充実	・児童の実態を把握し、必要と認められたすべての児童に対して「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の策定、実施、評価を行う。	・計画的に子ども支援会議を開き、全職員の共通理解のもと、児童の支援に努める。 ・通常学級在籍で支援の必要な児童の具体的な支援の在り方について、講師を招き、研修会を行う。	A	・子ども支援会議を定期的に行い、全職員で共通理解を図りながら、個々の児童支援に当たることができた。 ・SA、級外などの支援により、児童の困り感が少なくなっている。 ・講師(SO)による「教育相談の仕方」の研修を行うことができた。	・個別の指導計画の内容を見直し、活用しやすい物にしていく。 ・職員の指導上の悩みを吸い上げていき、実践に活かせるよう研修を行っていく。
④強い心と体の育成…強い意志と体力をもち最後まで頑張り抜く児童の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策

教育活動	●健康・ 体づくり	外遊びの奨励と定着化	・「1週間のうちに3回以上は外で遊ぶ」と回答する児童が85%を超えるようにする。	・業間や昼休みの外遊びの奨励と働きかけの工夫を委員会活動を通して行い、外遊びをよくする児童とそうでない児童の二極化を防ぐ。 ・縦割りグループ遊びの奨励を行う。	A 体育委員や6年生を中心にかっこタイムやなわとびタイム、縦割り活動等を計画的に呼びかけ実施できた。 例) ・体力運動能力調査では、男女とも4項目で県平均を上回った。 ・「なわとび週間」に合わせて、全校でなわとびカードを用意し、なわとび検定を実施した。外でなわとびの練習を自主的に取り組む児童が90パーセントとなった。 ・スポーツチャレンジに全校的に取り組むよう委員会活動で取り組んだ。どのクラスも記録が伸び、外遊びの活動が増えた。	天気の良い日に教室に残って騒ぐ児童を若干みかけたので、児童同士でも声をかけ合う雰囲気づくりを試みる。
		望ましい生活習慣の形成	・早寝の習慣が定着している児童の割合を80%以上、朝ごはんを食べて登校する児童の割合を95%以上にする。	・望ましい生活習慣の意識づけのため、9月・1月の初めに1週間続けての健康チェックを行い、その結果を家庭に返し、家庭の意識も高める。	A 家庭に返すことはできなかったが、実施することで、家庭の意識づけになった。もう少し内容を検討したい。	生活習慣の大切さや評価のための基準を示すことで、取り組みやすくする。
		食育の推進	・食事のマナーを身につけ、食べ物への感謝を忘れず、嫌いな食べ物でも食べることに挑戦する児童を育てる。	・月ごとの給食のめあてを教室に掲示し、給食時間に、食べ物の栄養と食事に関するマナーについて指導を行う。 ・各学級において、栽培活動を通して、食べ物への興味関心・感謝の心を育てる。	B 毎月めあてに関する資料を作成し掲示したが、一部の児童にしか徹底できなかった。	給食の時間に、クラスに入り、児童の実態を見ながら、少しの指導でいいので、積み重ねていく必要がある。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

- ・学校教育目標の実現にむけて、職員一丸となって取り組んだ。全体的に良好な評価であったが、課題となる項目もあった。
- ・保護者や地域の本校教育に対する関心は高く、授業参観や行事等への参加が多く、様々な意見をいただいていた。今後さらに、家庭・地域との連携を深めながら、コミュニティスクール事業の充実も図りながら、本校の課題を家庭・地域一体となって解決していきたい。
- ・学力向上の取組では、学力向上コーディネーターが中心となり取り組んだ。全国・県学習状況調査結果の分析、対応策の検討、そして学校全体での共通理解・共通実践に取り組んだ。今後も児童の実態把握から、授業における指導のあり方、

基礎基本を定着させるための効果的な指導法について実践を通して考えていきたい。また、家庭学習についても家庭への働きかけを丁寧に行いながら、確実に取り組むことができるように努めていきたい。

- ・来年度も特別支援教育を重点項目とし、子どもの困り感に寄り添った指導をこころがけたい。専門機関や医療機関と連携した支援体制の工夫・改善に努め、一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行ってきたい。

- ・業務改善・教職員の働き方改革の推進は今後の大きな課題である。タイムマネジメントを意識した業務改善に取り組むことができるよう、研修等を実施し、さらなる業務の精選と効率化を図る。

●は共通評価項目、○は独自評価項目